

---

# 天の川 ~ another story ~

氷正冷河

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天の川 ～ another story ～

### 【Nコード】

N9840K

### 【作者名】

氷正冷河

### 【あらすじ】

何もかもがイヤに感じる『現在』の少女。  
来る事のない『未来』を描く少年。  
会う事は叶わなくても、一緒に天の川を見ようと約束を交わす。

小さなきつかけで知り合い、互いの名前も顔も知らない二人が自身をみつめていく…小さな物語。

（前書き）

10年以上前にラジオドラマとして発表されている作品の author storyです。検索した結果、タイトルなども該当するものはなかったので、原作名は不明としてあります。

小さい頃から星を見上げるのが好きだった。唄うように、見守るように、優しく瞬く星。いつか、空から…もっと近い所から見たいて思っていた。

一番近くで見たいのが、天の川。

近くで見たら、どんなに綺麗なんだろう…地上からは、どうしても街の明かりや雲で遮られてしまうけど、宇宙からだったら遮る物は何もない。ただ、目の前いっぱい広がる星の洪水。

だから、ずっと…宇宙飛行士になるのが夢だった。

覚悟もしてたし、野生の勘っていうか…虫の知らせ？そんな感じなのでなんとなくだけど、病院に行くずっと前から予想はしてた。ただ、さすがに言葉で聞くと一瞬、目の前が真っ暗になった。

『もって、後1年』

月が綺麗で、虫が涼しげに鳴く夜。薬の匂いが染み付いた部屋で、父さんが悔しそうな顔で僕に言った。母さんは父さんに縋りながら声を殺して泣いていた。

「そっか」

それだけ呟いて、窓の外の遠い星を僕は探していた。

今までそんな事なかったのに、入院が決まったとたん酷い発作が僕を襲った。薬や点滴もいろいろやったけど、効果はその時だけって感じ。変な言い方だけど、そろそろ飽きないかな？って思うくらい日に何度も僕を襲う事もあった。

それでもずっと、僕は来る事はない未来の事だけ見ていた。そんな僕に父さんも母さんも、入学してひと月も行かなかった学校の友達もみんな、どこか憐れむ様な目でしか見なかった。ただ、励ます様に「大丈夫だよ」「治るよ」って繰り返すだけ。

本当は素直に聞けないけど、僕だってきつと同じ事を言うと思うから、笑って「ありがとう。頑張るよ」って答えていた。

身体は痛いし、苦しい。死ぬのも怖い。それに僕自身、自分を諦めたくないし、昔から夢見てきた宇宙飛行士にだってなりたい。この気持ちだけは消えない。

そんな僕の気持ちが勝ったのか、辛くて苦しいばかりだったのが、少しずつ落ち着いてきて、あの言葉も取り消されるんじゃないのかなってぐらいいろいっただけで歩き回れるようになった。

一縷の望み。こんな時にも当てはまるのかな？

しばらくすると一時帰宅も出来るくらいになった。って言うより、父さんと担当の先生にこり押ししたっていうのが正しいんだけど。

父さんが比較的の仕事が早く終わる水曜と日曜。もちろん、僕の体調が良い時だけ帰れる事になった。

学校に行かないまま、学年も1つ上がって、季節も夏間近になっていた。

今でも自分が病人だって事を否定する気は微塵もない。

前よりマシ。本当はただそれだけの事だと思っし、誰にも迷惑をかけずに普通の生活を送れるか？なんて聞かれた所で、即答で無理です。としかまだ言えない。

それでも、その時が来るまでずっと、病院にいる事は僕にだって嫌な事だったんだ。かといって、家で何するのって話しただけ。

まあ、気分転換かな。いつもは僕より小さい子達と遊んだりしてるけど、白衣を着た人達と薬独特の臭いにずっと囲まれてるのは少し…ね。

家では最近、インターネットを始めた。友達に教えてもらったコミュニティサイト。やっぱり長時間はできないし、日記書いたりチャットしたりってだけなんだけど、家に帰ると必ず日記は書くようにしてる。読みに来るのは大体は友達だけど、たまに全然知らない人も来てくれてメッセージを残してくれるのが嬉しい。

今日はどうしようかってしばらく考えて、少し気は早いけど七夕の事を書く事にした。後一ヶ月ちよつとだしね。

『もうすぐ七夕ですね』

【皆さんこんばんは。もうすぐ七夕ですね。

まだ5月。気が早いって思った方も多いかもしれませんがね。でも、僕は1年で1番、七夕が好きなんです。

虫たちの歌と一緒に静かに囁く夏の夜風。見上げると、金平糖をばらまいたみたいな星の輝く夜空。

毎年、小さな子供みたいに織り姫と彦星は会えたかな…なんて考えます。二人が会えたら、僕の夢も「一歩、近づいた」って思ったりします。

ほら、七夕には短冊を書くでしょう？僕は毎年、小さな笹を部屋の窓に飾って、願い事を書くんです。

僕の夢は「宇宙飛行士」

笑っちゃいますよね？でも…子供みたいな夢だけど、ずっと小さい頃からの夢なんです。

「いつか天の川を地球からじゃなくて、宇宙から見る」って…

でも、僕が宇宙飛行士になる前に科学が進歩してそうかな。

ほら、映画とかで21世紀は車が空を飛ぶ時代になってるし…空中歩道なんてのも出来てるかもしれないね。だとしたら、車で宇宙まで行けそう。

ロボットの友達もいて、学校もパソコンを使った自宅学習になるかも…それならちよつとズルいですね…僕の学校、結構遠いんです。

こうして考えると、どんな世界になってるか楽しみで、未来って凄く待ち遠しいですね。……………僕だけかな？

どんどんタイトルとズレていっちゃいましたね。今年の七夕はいつもより少し大きめの笹を飾ろうかな？

それじゃあ皆さん、おやすみなさい。

【良い夢が見られます様に】

ちゃんと載ってる事を確認をして、

「きつと、気が早いってみんな笑うんだろうな」  
そう思いながら部屋を出た。

水曜日。僕はいつものようにパソコンに向かっていた。

前に書いた日記へのメッセージ。みんな『気が早い』とか『今年は自分も短冊書こうかな』とか色々書いてくれていた。

その中で1人だけ、違う人がいた。知らない人。たぶん、女の子。

【まだ5月なのにホントに気が早すぎる。

天の川なんて毎年天気が悪いか、街の灯りで見えないし、それに、宇宙飛行士になるなんてムリなんじゃない？日本にいて宇宙飛行士になるなんてよっぽどの事がないと絶対にムリ。

だいたい、後3年もすれば21世紀なのにこんな世の中。どこをどう見て考えればそんな非現実的な愉快な考え方ができるの？】

「なんか…僕怒られてる？」

いつもはメッセージをくれても、返事は返さない。くれた人には失礼だけど、全員に返すとさすがに身体が辛いから。でも、この人に興味が湧いた。

無茶苦茶なのは承知でどうなるかわからない未来を思い描く僕。現在を見ていて、それでも僕に見る事は出来ない未来が訪れる人。

どうしてかな…もう少し、この人の話が聞きたい。そう思って、勢いのままメールを試してみた。

『ありがとうございます』

【はじめまして。

突然のメール…驚きますよね？ごめんなさい。

メッセージありがとうございます。あなたは、とても現実主義な  
んですね。

僕はいつもどうなるかわからない未来の事ばかり考えてたから、  
あなたの言葉がとても新鮮に思えたんです。

あなたは現在を見て生きていて、僕は未来を見て生きているみたい。  
い。

ちょっと、言い方が大げさかな？

でも、良かったらあなたの事を『現在さん』って呼んでもいいで  
すか？

もつと、現在さんの考えに触れたいって思ってたんです。

つい、勢いで送ってしまつて…本当にごめんなさい。

おやすみなさい。

未来より】

返事が返つてくるといいな…それだけの気持ち。

「僕が『未来』で、この人が『現在』って…きっと呆れるんだろう  
な」

顔もわからないこの人が呆れる様子がなぜか浮かんで、自然に顔  
が緩んだ。

「未来…か…」

少し自虐的な気持ちのまま、送信ボタンを押した。

水曜から日曜までの日が凄く待ち遠しい。

いつもの場所に戻ってから、いつものように小さな子の相手をする。みんなの相手は嫌いじゃない。ただ、返事が来たらいいな、っていう気持ちだったはずなのに、あの人…現在さんから返事が来てるんじゃないかって思うと、明日が日曜ならいいのにつて不毛な事を思ってしまう。

今まで、帰れる日が待ち遠しくなかったのかっていうと、そうじゃないんだけど…自分で思っている以上に現在さんが気になっていた。

やっとで待ちに待ったその日が来ると、僕は急いで自分の部屋に入った。

「返事がありますように」

願いながらパソコンのスイッチを入れると、新しいメールの中に友達以外の人からのメールがあった。届いたのは木曜日だった。

あまりにも急いだから、母さんが心配して部屋に来たけど、僕は適当な返事しかできなかった。

『変な人』

【あな た っ て 変 な 人 。

あんな書かれ方されたら、メールを送るところか怒るのが普通でしょ？なのに、わざわざメール送って…しかも、ありがとうって…考えられない。

私が書いた事なんて誰でも思いつくのに『未来』と『現在』を見て生きてるなんて大げさ過ぎ。

夢なんて、しょせん夢。叶えられる人なんて、どうせほんの一握りだけ。

考えるだけムダなんじゃない？

だいたい、私なんかの考えに触れたって、何かが変わるわけでもないでしょ。

### 現在より】

僕が予想していた以上に呆れられてるみたい。

一緒になってメールを見ていた母さんは、ただ笑って部屋から出て行った。

「そんなに变だったかな？」

首を傾げながら現在さんからのメールを読み返して、返事を考えた。でも、現在さんって呼ぶ事は受け入れてくれたみたいで嬉しい。

『現在さんへ』

【こんにちは、現在さん。

メールをもらって、1日も早く返事をしたかったんですけど…なかなか返事が書けなくて。ごめんなさい。

『変な人』って初めて言われました。『子供っぽい』とかよく言われるんですけど…そんなに变なのかな？

自分ではあまりわからないですね。

現在さんの考えは本当に新鮮ですよ。

確かに誰もが…僕でも思い付く事だけど、あんなにはつきり言ってくれる人は周りにいないし…真っ直ぐに伝わって来るんです。だからこそ、新鮮なのかな？

そうだ。現在さんは夢ってないんですか？

なりたい職業とか…将来こうならないかな？とか。

現在さんの夢、聞きたいです。

## 未来より】

現在さんから返事があつた事が本当に嬉しかった。

「人はみんな違うモノを見ている。それは考え方が同じ人がいない事と同じ。」

見ているモノが違うから考えも違うし、例え同じモノを見ていても、その人で見え方が違うから同じ考えなんてない。ただ、考え付いた事が似てるってだけ」

ふと、そんな事を思った。

そのまま、ぼーっと画面を見てると、暫くして現実さんから返事が来た。

『未来君へ』

【返事が来るとは思わなかった。本当に変な人。私みたいな人間の言葉が新鮮なんて、絶対に変。

夢はしょせん夢でしょ？マンガやアニメの世界じゃないんだから、少なくとも未来君が思う様な世界ではないと思う。

【現在より】

確かにそうかも。ただか2、3年で車が空を飛び出すなら、僕だつてこのままの状態じゃない気もする。

現在さんからのメールを感心するみたいに読み返して、あれ？って思った。

今度こそは返事が来ないかもって思ったけど、思いきつて送ってみる。

『現実さんへ』

【もしかして、現実さんって自分が嫌い何ですか？

あまり『自分なんか』って思っちゃダメですよ。『自分』が誰よりも信じて好きでいなくちゃ。ね？

夢はしょせん夢って…ちょっと悲しいですね。

そうだ。今度の七夕。一緒に見ませんか？

場所は違うけど、一緒に天の川を見ましよう。そして、願い事しましよう。「現在さんの夢が見つかります様に」って。きっと叶いますよ。

【未来より】

現在さんには失礼かもしれないけど、まるでもう一人の僕自身と

話しをしているみたいだった。

『自分が誰よりも信じて好きでいなくちゃ』

僕はどうなんだろう…

自分の事は嫌いではないし、それなりに好きだと思う。でも、信じてるかつて聞かれたら素直に頷けない。

夢を持つことは諦めていないつもり。だけど、ソレが訪れる事を信じていない自分。

これは自分を『信じる』事にはならないんじゃないのかな…

『未来』と自分で名乗っておきながら、描いた『未来の自分』を信じていない。現在さんとのやり取りで初めて認めた事だった。

お互い、会話の成り立っている様な噛み合っていない様な現在さんとのやり取りは僕が強引に引きずる様に続いた。

僕はどこかの映画や漫画の世界みたいな『未来』の事やゆっくりと近づいてくる七夕の事。現在さんからのメールは…愚痴が多いかな？でも、現在さんらしくて楽しかった。

僕の事を全く知らないから飾らないし、変に気遣うこともない。相変わらず、子供じみた僕のメールに真っ直ぐな言葉を返してくる。知らない人が見たら、ただメールで苛めを受けてる様にみえるくらい傷付く様な事もあった。さすがにどう返したらいいかわからなくて悩んだ事もあった。でも、それは現在さんの真っ直ぐな気持ち。

僕だって、本当の現在さんはどんな人か知らない。だけど、本当に真っ直ぐで、自分に正直な人なんだって思った。ただ、自分の思いや考え方を伝えるのが少し苦手なちょっと不器用な人。

メールでそう送ったら、たった一言で、「ばかじゃないの？」って返ってきたけど。

現在さんの事が気になった理由…それはきつと、僕が目を背けてきた事を言い当てられたからなんだと思う。あの時のあのメッセー  
ジで。

そう…確実に『未来』の訪れる現在さんが僕は羨ましかったんだ。現在さんに本当の僕を知られてもきつと変わらない。戸惑う事はあつても、今までみたいに変わらない、真っ直ぐな言葉をくれる。そういう人だつて思う。

でも、僕は言えなかった。

現在さんには知られたくないつて思った…『いつまでも子供みたいな夢や未来を望む変なヤツ』つて思っていて欲しかった。

現在さんへメールを送るのは家に帰る週に2日だけ。すごく長い間やり取りをしているように思えても、まだ数回しかない。今では僕が家にいない間でも現在さんからメールが来る事もあったから、その度に父さんと母さんが印刷して病院まで持ってきてくれた。

ベッドの中で何度も読んで、次はどうやって返事をしようかつて、ずっと考えていた。

そんな僕を見て、「現在さんの事を話している時が一番元気だ」つて、2人が言うくらい今の僕には無くしたくない大切な楽しい時間だった。

6月も半ばになった頃…発作は起きないものの、発熱が続くようになって、ベッドから動く事も許してくれない。

そんな中で、病院の先生に呼ばれた父さんの仕事用のパソコンを借りて一通のメールを書いた。病院からじゃ無理だけど、保存さえしてしまえば帰ったときに自分で送る事ができるからね。

きつとバレたら、父さんには怒られるし、現在さんには「気が早すぎる」ってこれまでに以上にも呆れられてしまうかな？

毎年の事だし、先の天気予報でも雨って言うてたからそのつもりで書いた、七夕の日に真っ先に送るつもりでいるメール。

最近じゃあ、顔もわからない現在さんの呆れた顔が前以上に浮かんで、これも今送ったら…って想像してしまうくらいになっていた。「七夕の日…ちゃんと自分で送りたいな」

あの日、白い無機質な部屋で遠い星を探した時から、1年と少し過ぎていた。苦しくて辛い日の中で、誰もが驚くくらい身体が楽に過ごせたのがこのひと月ぐらい。

最近では、どうしてここまで僕が生きたのかって考える様になっ  
っていた。

僕がずっと夢だけは捨てないでいたから。

先生や父さん、母さんが僕のためにいろんな事を頑張ってくれたから。

いろいろ考えたけど、どれも正解で、どれも違う気がした。考えた事に当たり外れなんかないとは思っけどね。その中でコレかなって思ったのが、

『僕が現在さんに逢うための時間』

その事が『現在』の『僕』と『未来』の『現在さん』に必要なだったんじゃないかなって思った。

『現在』の『未来<sup>ぼく</sup>』に必要な事は『現在の僕から目をそらさない事』  
『未来』の『現在さん』に必要な事は『もう少しだけ、自分を好き

になる事』

ただの僕の願望でしかないかもしれないけど…そう思うと、今までの苦しみや頑張ってきた事が…僕が今まで生きてきた意味ができた気がしたんだ。

やっぱり…そうあって欲しいっていう、僕の願望だね。

七夕の日に送るはずのメール…アレを最後に僕は自分の身体の原因がきかなくなっただ。

1年前のあの時と同じ…発作が絶え間なく僕に襲いかかった。ただ…あの時と違うのは、薬も効かないということ。

もって、後1年。

つまりは、1年経つ前に僕は消えるって事。それでも、僕は生きていた。

だから…今回は本当に終わりが来るんだって…わかった…

朦朧とする意識は、手を握る人の事も昼夜の感覚もわからないのに、ただ…7月を迎えた事…まだ、七夕には数日ある事だけ、わかっていた。

「あと少しだけ…」

ずっと、その言葉を繰り返した。

死ぬのは怖い…でも、覚悟はあの時に決めていたから受け入れる。

だから…現在さんと…彼女とのたった一つの約束だけ、果たさせて欲しい…それだけを思っていた。

ねえ、現在さん…貴女は優しい人だから、こんな僕の一方的な約束だけど、守ってくれるでしょう？

笹の葉が風で揺れた時みたいな、そんな音が聞こえた気がした。相変わらず身体は苦しい。なのに意識が無駄にハッキリとする。何か口を覆ってて煩わしい。僕がそう思っているのを感じ取ったのか、大きな手がソレを外してくれて、ちゃんと目を開くと、父さんと母さんが僕の手を握っていて泣いていた。その後ろから、白い服を着た人が出て行くのが少しだけ見えた。

2人が何度も僕の名前を呼んでいるけど、すごく遠くから聞こえるみたいで、なんだか変な感じがして僕は自分でもわかるくらいに笑った。

「ごめんね、心配かけて」

擦れ擦れだったけど、ハッキリと2人に伝える事ができた。僕の手がいつそう強く握られているのも感じる。明日は天の川を見るんだろって言われたけど…コレが最後なんだなって思った。

「ねえ…お願いがあるんだけど、いいかな？」

一生懸命、握られた手に力を込めたけど、少しも動いたような感じがしない。

「現在さんに謝ってほしいんだ。約束…守れそうにないから…」

2人の口が動いているのは見えるのに、だんだんと声が聞こえなくなっている。

「父さんのパソコンにメール…ホントは自分で送ってたけど…ごめん。」

きつと、現在さん、呆れるだろうな…」

いつもみたいに現在さんの呆れ顔が思い浮かんで、また笑えてし

まう。

「暇がすごく重い。伝えたい事がまだあるのに…勝てそうにない。それから……」

泣かないで、笑っててよ。

声になったかはもう、わからない。ただ、ありがとうじゃなくて父さんと母さんには笑顔でいて欲しいって伝えたかったんだ。消えそうな小さな光しかない暗闇で、たくさんの星を探せるように、僕は目を閉じた。

『今日は七夕ですよ。』

【くんばんは。現在さん。

今日は待ちに待った七夕ですね。

長い間、返信出来なくてごめんなさい。

たくさんメール送ってもらったのに…メールを見てもなかなか、パソコンにさわれなくて…本当にごめんなさい。

えっと…約束…覚えてますか？今日、一緒に天の川を見るって。7月に入ってから雨が降り続いてますが、絶対に今夜は晴れますから！

たくさんのてるてる坊主を作ったって言うたら、現在さんに笑われてしまいそうですね。

現在さんは短冊用意しましたか？

僕はばつちりですよ。

今年はいつもより大きな笹を飾ったんで、知り合いの子供達とたくさん書いたんですよ。

「宇宙飛行士になれますように」それから「現在さんに夢が見つかりますように」

他にもたくさん書いてて…織り姫と彦星に怒られそうです。

現在さんは願い事…何か考えましたか？もしあったら、今から短冊に書いて飾りますよ。そのほうが願い事、叶いそうですからね。

早く雨上がってくれないかな？

現在さん見て下さい！

今日、絶対に天の川見られますからね。

### 未来より】

約束守れなくてごめんなさい。天の川、見れたかな？

僕、貴女からたくさんモノをもらったけど、何か返す事ができたかな？

今まではずっと、ただ宇宙飛行士になる事だけが僕の夢で願いだったけど、現在さんの夢が見つかるようになっていうのも本当に僕の願い事だから…2人分の願い事ならきつと叶うよね？

ねえ…現在さん…

## （後書き）

前書きにも書いてありますが、この作品はラジオドラマの another story です。聞いた物は少女目線でしたが、少年目線を作ってみました。

元がドラマ形式ですので、エッセイっぽく、あえて、穴だらけに作りました。

立ち止まり、何度も同じ事を考えさせていますが、その穴に着いた時、自分自身の考えをその穴に埋めてもらえたらと思います。

パソコンが普及する前、携帯電話ができた頃の話なので、今に置き換えるともどかしいですが、『未来』君から夢を諦めない気持ち少しでも感じて取ってくれたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9840k/>

---

天の川 ~ another story ~

2010年10月10日12時02分発行